
日本ロシア文学会

関東支部報 No. 37(2019 年 5 月)

〒223-8521 横浜市港北区日吉 4-1-1 慶應義塾大学 日吉キャンパス 朝妻恵里子研究室気付

日本ロシア文学会関東支部事務局

E-mail: asazuma@keio.jp

来る 2019 年 6 月 1 日(土) 12 時 45 分より、早稲田大学戸山キャンパス 36 号館 681 教室にて、春季発表会が催されます。8 本の修士論文成果報告と、1 本の博士論文成果報告がおこなわれ、その後、支部総会と懇親会が開催予定です。本報に発表要旨を収録しております。ふるってご参加ください。

12:45-12:50 開会の辞

[修士論文成果報告]

12:50-13:20 齋藤翔「チェーホフ作品における動物：ダーヴィニズムからディスコミュニケーションへ」 司会：齋藤陽一（新潟大）

13:20-13:50 安島里奈「ロシア・ロマン主義におけるルサールカの形象」 司会：鳥山祐介（東大）

13:50-14:20 芹川京次竜「市場経済移行期のバザールにおける商人の無関心に関する考察－カザフスタン共和国アルマティ市ニューリスキーバザールの事例から－」 司会：伊東一郎（元早稲田大）

14:30-15:00 プロホロワ・マリア「ロシア現代文学における指小語の機能および日本語訳の可能性」 司会：井上幸義（上智大）

15:00-15:30 土屋優「ミラン・クンデラと世界文学、チェコ作家ヴラヂスラフ・ヴァンチュラを通して」 司会：石川達夫（専修大）

15:30-16:00 真島亮吉「B・フラバル『あまりにも騒がしい孤独』とポストモダン」 司会：石川達夫

16:10-16:40 梶彩子「世界的文脈におけるレオニード・ヤコプソンの舞踊作品」 司会：村山久美子（早稲田大）

16:40-17:10 米山貴文「サンボの起源に関する研究－柔道との関連を中心に－」 司会：伊東一郎
[博士論文成果報告]

17:10-17:45 渡部直也「スラヴ諸語における音交替」 司会：古賀義顕（東海大）

17:50-18:10 支部総会

18:30- 懇親会 於「アットン」（新宿区西早稲田 1-22-2 tel: 03-3205-8267）

会費：常勤職（任期付を含む）にある方 5,000 円 それ以外の方 3,000 円

昨年 8 月に、ベオグラードで開催された第 16 回国際スラヴィスト会議に大学在職中最後の参加をした。私が最初に参加したのは 1983 年のキエフの大会だから、35 年目の大会となる。参加してみて気づいたのは、スラヴ圏全体を見渡して論じるスラヴィスト的な発表が目立って少なくなったことである。思い起こしてみれば、この 35 年は、残念ながらスラヴ諸国におけるスラヴ学の衰退の 35 年だったような気がする。

1983 年のキエフの大会の時はウクライナはソ連の一部であり、キエフで開催されたにも関わらず、多くのウクライナ人研究者はロシア語で発表していた。1988 年のソフィアの大会の時、ソ連はペレストロイカの熱気に溢れていた。しかし東欧各国では各民族の独立を志向する遠心的な動きが加速していた。その流れの中で 1991 年にユーゴスラビアは内戦に突入し、ソ連は崩壊した。1993 年の 1 月にチェコとスロヴァキアは分離し、その年のブラチスラヴァの大会は、独立スロヴァキアでの大会となった。それまでロシア語で発表していた馴染みのウクライナとベラルーシの研究者はこの大会で一斉に発表言語をウクライナ語とベラルーシ語に切り替えた。2003 年の独立スロヴェニアのリュブリャナ大会の時は、初めて大会参加費がユーロで徴収された。この年からスロヴェニアは EU 加盟交渉に入り、2004 年に加盟した。2013 年にベラルーシで開催されたミンスクの大会の際は、街中で聞こえるのはロシア語だけなのに、逆に発表言語が 半ば意図的にもっぱらベラルーシ語が用いられているのが印象的だった。そして昨 2018 年、第 16 回スラヴィスト会議がベオグラードで開かれたこの年は私にとって感慨深い年であった。その半世紀前の 1968 年に第 6 回スラヴィスト会議がプラハで開催され、その閉会直後の 8 月 20 日にワルシャワ条約軍の戦車がプラハの都心に乗り入れたのだった。いわゆる「チェコ事件」である。「スラヴ諸民族の友好」というスローガンが虚しく響いた夏であった。その年に大学に入学した私がスラヴ学に進んだのは、この事件の衝撃からだった。

考えて見れば、第二次世界大戦後のスラヴ学は、ソ連の主導の基に推進されてきた。従って戦後のスラヴ諸国では、それぞれの民族について、民族起源をスラヴ学の視点以外から論じることがご法度で、例えば社会主義時代のブルガリアではブルガリアの民族的アイデンティティをチュルク系遊牧民であるプロト=ブルガールとの関連で論じることが困難だった。ことほどさように社会主義時代のスラヴ学は政治と密接に結びついていた。それだけに社会主義崩壊後のスラヴ圏でスラヴ学離れが雪崩のように起きたのは理解できる。その象徴のように今回ベオグラードの会議において次回のスラヴィスト会議の開催地に立候補したのはパリとイスタンブールで、スラヴ各国はもはや手を挙げなかった。結局 2023 年の第 17 回スラヴィスト会議は、スラヴィスト会議史上初めて非スラヴ圏のパリで開かれることになった。

しかし言語学的なスラヴ圏というものは事実として確実にあり、それを無視することはできない。古いタイプのスラヴィストである私はスラヴ圏の人文科学はやはりまず文献学的な基礎の上に築かれねばならない、と考えている。その視点からすると、スラヴ学的に興味あるテーマはまだ未開拓のまま、若い研究者たちの前に広がっていると思う。

思いつくまま、アトランダムにテーマを挙げてみよう。ポロツキーによるポーランド語とロシア語による音節詩、ゴーゴリとウクライナ文学、ポーランド語からロシア語に執筆言語を変えたヤセンスキー(ヤシェンスキ)、ポーランド・ロマン主義におけるウクライナ派詩人たち、ゴーゴリの同郷の詩人でウクライナ語とロシア語で詩作したフレビンカ(グレビョンカ)、バフチンとクンデラにおける「ポリフォニー」の概念、トゥヴィムによるロシア文学のポーランド語訳、レシミヤンのポーランド語とロシア語詩、19世紀におけるセルビア叙事詩のロシア語訳における韻律の処理、プーシキンの「西スラヴ人の歌」とセルビア民謡、なぜか顧みられないシェフチェンコのロシア語散文、キシユによるロシア語詩のセルビア語訳、クリジヤニチが構想した「共通スラヴ語」、共通スラヴ語時代のスラヴ神話の再建、等々…。

比較文学的な領域に目を向ければ、チュッチェフのフランス語詩、リルケのロシア語詩、ツェランによるロシア語詩のドイツ語訳、ブコヴィナの詩人フェチコヴィチのウクライナ語とドイツ語による詩作、ツヴェターエワによる自作のフランス語訳、16世紀ドゥブローヴニク(ラグーザ)におけるイタリア・クロアチア二言語併用文化、コハノフスキのラテン語詩、バルトルシャイティスのロシア語詩とリトアニア語詩、等々…

音楽の分野では、同じテーマを扱ったオペラであるドヴォジャークの「ディミートリイ」とムソルグスキーの「ボリス・ゴドノフ」、ヤナーチェクの「グラゴル・ミサ」とクロアチアのグラゴル聖歌、なぜか歌われないキューイのポーランド語歌曲、等々…。

それらのテーマは既に先達によって論じられているものもあれば、手付かずのものもある。

思えばブラハのスラヴィスト会議の5年後、1973年にワルシャワで開催された第7回スラヴィスト会議にモスクワ=タルトゥ学派と呼ばれるソヴィエト構造主義の論客5人(イワーノフ、トポロフ、ロトマン、ピャチゴルスキー、ウスペンスキー)は、「文化の記号論的研究に関するテーゼ=スラヴ・テキストに即して」を提出した。社会主義リアリズム論全盛の当時のソビエト文芸批評を考えるなら、このテーゼは、5年前のチェコ事件への批判を暗に含んだソ連のスラヴ文献学からのプロテストであったかもしれない。第一次モデル化記号体系たる自然言語の上に構築された、第二次モデル化記号体系として文化を考える彼らの視点は当時の社会主義スラヴ圏の人文科学においては異端であった。このテーゼもソビエト本国では公刊されず、この会議に際してワルシャワで初めて活字になった。テーゼの起草者のうち四人は既に鬼籍に入り、存命中なのはボリス・ウスペンスキーのみになってしまったが、豊饒な可能性を秘めたこのテーゼはしかしその後のスラヴィスト会議の諸発表において十分に展開されたとはいえない。

ベオグラードの会議が閉会后、各国スラヴィスト協会の代表は西セルビアにあるヴーク・カラジッチの生地トゥルシチへのエクスカージョンに招待された。私もそれに参加して彼の生家

を訪れたが、その際に、「プーシキンが自分の蔵書にあったカラジッチの民謡集から2篇のセルビア民謡を訳していて、その一つ「夜鶯」はチャイコフスキーが歌曲に作曲しているよね」とセルビア・スラヴィスト協会の代表、ボシコ・スヴァイジッチに言ったら、「その曲を知ってるならここで歌ってくれよ、カラジッチも喜ぶから」、と藪蛇の展開になり、私はアカペラでチャイコフスキーをカラジッチの生家の前で歌う羽目になった。思えばプーシキンの「夜鶯」の訳詞は、1824年に出たカラジッチの『セルビア民謡集』の第2版による1835年の作、チャイコフスキーの作曲は1886年のことなので、1864年に亡くなっているカラジッチはプーシキンの訳詞は知りえてもチャイコフスキーの曲は知らなかった…。こんなこともスラヴ学のテーマの一つであったことに歌いながら私は気づいた。さて、これは余談である。

今年の関東支部の春の研究発表会は、テーマもスラヴ・旧ソ連圏の広汎な地域に渡っていて興味深い。多言語に通じた若い優秀な研究者が輩出しているこの頃、願うらくは、それぞれの発表が、広いスラヴ・ユーラシア的パースペクティブのもとになされ、また聞かれ、相互に刺激を与え合えるようなものになることを老婆心ながら思うのである。

動物論(Animal Studies)の観点からチェーホフの動物表象を分析する。

動物論は今日の文化研究で英語圏を中心に注目されている。近代西欧で影響力を保持してきたデカルトの動物機械論に対し、動物の理性の有無ではなく、苦しみを感じるかどうかを問題とすべきだと論じた功利主義哲学者ベンサムの問題提起を端緒に議論されている。ピーター・シンガー等の社会科学的議論は、動物が苦しみを感じることを自明視して動物解放を明晰に実践しようとする傾向がある一方、デリダ、J.M.クッツェー等の人文科学的な議論・作品は動物との相互理解の困難さ・曖昧さを不可避のものとして直視する傾向がある。

発表ではベンサムに端を発する動物論を参考にし、チェーホフ作品の動物表象の曖昧さ、二重性について、以下の三つの観点より説明する。

第一のダーウィニズムの観点では『決闘』『ワーニャ伯父さん』等の作品を中心に扱う。ダーウィニズムは当時の西欧、ロシアで大きな影響を有していたが、各個人によって捉え方が異なり、チェーホフのようにその無目的性を正確に理解していた思想家・表現者は少なかった。チェーホフはダーウィニズムの科学的議論に影響を受けながらも、その限界をも表現している。

第二の分類学の観点では、『カシタンカ』等を扱う。分類は進化論と並ぶ近代の動物科学の重要な思考方式であるが、変化する存在である動物を静的・排他的に分類するという行為には些かの問題が生じる。チェーホフは人間中心主義的な分類学を混乱させる生きた動物の躍動感を表現している。

上記の二つの観点から、チェーホフは科学的思考を重視しつつも、それだけでは動物を理解できないとみなしていたことがうかがえる。これを踏まえ第三のディスコミュニケーションの観点から『ふさぎの虫』等を扱う。この掌篇は動物と人間間のコミュニケーション・共感の可能性と不可能性を二重に表現している。また馬のジェンダー表現の混乱によって動物の曖昧さがいや増している。

概して言えば、チェーホフにおける動物は、科学的分析の対象であると同時に人間の科学を超え出でる存在であり、人間と共感できる存在であると同時にコミュニケーションが不可能な存在でもある。このような動物の曖昧さ・二重性は、現在の動物論においても留意されているところであり、チェーホフ的な動物表象は今後も大きな示唆をもたらさうだろう。

ロシア・ロマン主義におけるルサルカ形象

安島里奈（東外大博士課程）

東スラヴのフォークロアには、ルサルカという女性の姿をした水の精がいる。アレクサンドル・プーシキンの詩『ルサルカ』（1819）において、元来フォークロア上の存在であったルサルカが文学作品に初めて登場する。この詩以外に、ロシア・ロマン主義（1810 から 1830 年頃）の時代には、プーシキンの物語詩『ルスランとリュドミーラ』（1820）、詩『見捨てることができるなら僕はなんと幸せだろう．．．』（1826）、劇詩『ルサルカ』（1832）、ミハイル・レールモントフの詩『ルサルカ』（1832）、オレスト・ソモフの小説『ルサルカ―小ロシアの伝説』（1829）、小説『クパーロの夜』（1831）、ニコライ・ゴゴリの小説『5月の夜、または身投げした娘』（1831）、小説『恐ろしき復讐』（1832）、小説『ヴィイ』（1835）といった作品にルサルカが登場する。

ロマン主義以降も現代に至るまでロシア文学においてルサルカは作品の題材として選ばれ続けていること、ロシアのフォークロアにはルサルカ以外にも様々な精がいるにもかかわらず、創作の対象として描かれ続けているのはルサルカのみであることに注目し、ロシア文学におけるルサルカ形象の系譜を明らかにするという最終的な到達目標を設定したうえで、その基礎的段階として本研究では、ロマン主義の時代に限定して分析を行った。

フォークロアにおけるルサルカと文学作品におけるルサルカの比較、分析の結果、どの作品においても、ルサルカはフォークロア的な、分類的・弁別の特徴を保持していること、ロマン主義時代におけるルサルカの登場する文学作品は、ルサルカの内面が描かれない作品と描かれる作品に二分されることが明らかになった。前者のタイプでは、ルサルカは美しく魅惑的な娘として描かれ、エロティックなイメージ、人間を死へ誘い、破滅させる危険なあるいは恐ろしいイメージが付与されていた。また、生前の様子やルサルカになった経緯などについては不問に付されており、ただルサルカとして存在しているその様子が人間（男性）の側からの視点で捉えられており、例えば「哀れ」、「不幸」などと言われたり、ルサルカの外見や行動といったフォークロアの特徴について述べられたりしており、一方的に捉えられていた。反対に、後者のタイプでは、ルサルカを捉える視点は、人間（男性）側からルサルカ自身（女性）へと移行する。特に、復讐譚の性質を持つ物語では、女性たちは「身投げ」によって地上の世界（生の世界）から水中の世界（死の世界）へと「移行」し、ルサルカに「変身」する。これは「秩序」（ここでは、身分差における上下関係を指す）に従っていた状態から「秩序」に従わなくてよい世界へと「移行」したことを意味する。ルサルカになることで、生前は社会的・身分的不平等に抗うことをせずに従っていた「秩序」から解放され、復讐を果たすことが可能になる。また、とりわけ個としてのルサルカやルサルカの内面が描かれる作品では、作家たちはルサルカとなった女性の「生」そのものに関心を抱き、フォークロア的なルサルカとしてだけではなく、新たな、自由な「生」を与えられた女性を描いた。

市場経済移行期のバザールにおける商人の無関心に関する考察
ーカザフスタン共和国アルマティ市ニコーリスキーバザールの事例からー

芹川京次竜（筑波大修士課程修了）

本研究はカザフスタン共和国アルマティ市のニコーリスキーバザールを調査地とし、そこで見られる「商人たちの無関心さ」を考察することを目的とするものである。人類学の研究において、バザールには「情報の偏在」が存在し商人と客の間で激しい価格交渉や顧客関係が見られることが特徴とされていた。しかし、本研究が調査地とするニコーリスキーバザールでは激しい価格交渉や、強固な顧客関係は見られず、商人が客に対して「無関心」な態度をとる。

本研究では事例や聞き取りなどの調査を通して「無関心さ」が存在する理由として、「バザールの流動性」と「客が持つ選択肢の多さ」の二点を提示する。ニコーリスキーバザールの商人たちは、バザールで商売を始めて浅い者が多く、商人の入れ替わりも激しい。また、商人の中には自身が店の主人ではなく、雇われたパートの売り子がいることも分かった。こうした参入・離脱の容易さ、商売に対する責任の低さが「無関心」な態度につながっている。また、カザフスタンのバザールは、ソ連解体後の市場経済移行期に数を増やした商業的な空間であるが、現在では政府による統合・廃止の動きが見られる。バザールに代わる商業施設として存在するのがスーパーやショッピングモールである。このように客たちはバザール以外の場所でも買い物をすることができる選択肢の多さが存在する。加えて、ニコーリスキーバザールには同業種の店舗が複数存在し、どの店でも同じような品質・値段の品物を買うことができる。つまり、ニコーリスキーバザールにおいては探索コストが高くなく、価格交渉などをする必要がないのである。商人だけでなく客側も商人たちに強い関心を持っているわけではないことが「無関心さ」を生んでいるのだ。

ニコーリスキーバザールはバザール内部だけでなく、周辺部の路上や広場でも商人の姿を見ることができる。しかし、壁を一枚隔てた周辺部では商人たちに「無関心」な態度を見られなかった。なぜなら利益が不安定であり、警察の摘発によって商売自体が不安定になりかねない路上では「無関心」な態度でいるわけにはいかないからだ。路上の商人たちの出自や商品の質が不透明であるがために、価格を明示するなど情報の不透明性を低くしようとするのである。

ここまでの議論から、本研究ではニコーリスキーバザールとは商人と客の双方にとって「受け皿」のような存在ではないかと結論付ける。バザール内で見られる「無関心さ」こそが、あらゆる商人と客との間で無駄な探索コストを発生させない懐の深さを作り出しているのだ。

指小語とは、指小辞（「小さい」という意味合いを加える接頭辞や接尾辞）の含まれる単語である。指小辞は多くの言語に存在するが、ロシア語の場合、指小辞（指小接尾辞）は種類も機能も特に豊富で、文学の中では表現手段として有力である。ただし、他の言語に翻訳する際、指小語の意味合いを適切に反映することが困難なケースが多い。それには、指小語の役割の解釈の難しさと、目標言語における同様の言語手段の不足といった理由がある。今回の研究では、翻訳者の負担を減らすために、指小語の機能を分析した上でその日本語訳の可能性を探ることにした。具体的な翻訳例として、ロシア現代文学の作品（4冊）の日本語訳を採用した。

まず、指小語の機能を分析し、主な機能として、フォークロアらしい文体の構成、田舎のコノテーション、矛盾に基づくユーモアの構築、登場人物の性格、ジェンダーおよび心情の表現（幼稚、女性らしい、不誠実など）を選定した。なお、人名に指小辞をつけた愛称および児童文学における指小語の特殊な役割にも触れた。

次に、参考文献および対象作品（原文と日本語訳）を元に、ロシア語の指小語の日本語訳の可能性について論じた。愛称の翻訳方法は、原文の響きのまま残すこと、よりニュートラルな呼び方に変えること、指小辞を日本語の愛称や敬称で代用することがある。日本人を対象に愛称の認識度に関するアンケート調査も行ったが、ロシア語の愛称に対する日本人読者の意識が低く、愛称を原文のまま残す場合、注や文中説明を使って読者の意識を高めていく必要性が分かった。

他の指小語に関しては、直接翻訳に反映されないことの方が多いが、反映されている場合もある。日本語においてはロシア語の指小辞と同様の意味合いを持つ生産的な語構成要素が少なく、比較的適用できる「小」と「お」でも生産性が足りない。そのため、指小語を翻訳する際、「追加の語彙」（「小さい」「粗末な」「私の」等）および「語彙の選択」（敬語、幼児語、女言葉など）を使うことが多い。間接的手段として、オノマトペ、平仮名、やりもらい動詞といった日本語特有の言語手段および方言を活かす可能性についても指摘した。さらに、客観的な小ささを表す指小語は最も訳しやすく、フォークロア性やユーモアを表す指小語および重複指小（形容詞「小さい」+指小語など）は最も訳しにくいことが分かり、その訳し方についてもいくつかの案を提示した。そういった本研究の実績は、翻訳論および翻訳実践のみならず、文学、比較言語学や外国語教育にも役立つと考えられる。

本発表では発表者自身の修士論文を基に、チェコの作家ヴラヂスラフ・ヴァンチュラ論を通じてみるミラン・クンデラの世界文学観について発表する。

チェコ出身で現在フランス在住であるミラン・クンデラは、その出自ゆえ作品が世界に発表された当初、政治的で一面的な読みをされることがあった。そして、クンデラ自身はそのような読みに対して度々抗議してきた。しかし、チェコスロヴァキアでの社会主義体制も崩壊して四半世紀以上経た現在では、そのような一義的な読みをされることはほばないだろう。では、どのようにしてクンデラは脱政治的作品受容を獲得したのかということが、本発表における問いである。

この問いを論ずるに当たって、まずパスカル・カザノヴァの世界文学空間というコンセプトを用いる。カザノヴァは、地理的歴史的空間からは切り離された、独自の規律を保つ文学の世界、すなわち世界文学空間があると説いた。この空間は様々な文化的アイデンティティ集団同士のライバル関係によって成立しており、この競争において競われるのはそれぞれの集団が保持する文化的、文学的蓄積の量である。カザノヴァはこの蓄積を文学資本と呼び、資本に富んだ集団と貧しい集団があると述べる。この資本に富んだ集団（主にフランスなどのヨーロッパの大国）では、文学創作と政治的問題が切り離されており、文学の自律が保たれている。また、彼らは他の貧しい集団出身の作家たちに賞を与えたりすることによって、文学的威光、文学的自律を付与することができる。そして、文学的資本を増やし、文学的自律を得るためのストラテジーとして、本質的には同じものが世界文学空間形成の初期段階から繰り返し使われているとカザノヴァは主張する。

クンデラの脱政治ストラテジーは、以上のようなカザノヴァの論から読み解くことができる。と考える。まず、クンデラの世界文学観のベースは、60年代に彼が発表した同郷の作家であるヴラヂスラフ・ヴァンチュラ論に認められる。クンデラはこの評論で、ヴァンチュラをチェコ文学の歴史に結びつけながらも、フランソワ・ラブレールと対比することによって、チェコに欠けていたルネサンス的遺産を横領し、ラブレールというフランス、すなわち大文学空間の権威を利用している。つまり、これによりクンデラは、チェコ文学の文学的資本を増やそうとしたのである。そして、ヴァンチュラやラブレールから文学的技法を学ぶことにより、大文学空間から価値を認められるクンデラ自身の技法を編み出したのである。

以上の議論を踏まえて、クンデラの代表作の一つである『存在の耐えられない軽さ』を分析すると、この作品で用いられる様々なレベルにおける技法の工夫は、それぞれ、あるいはそれ全体が、カザノヴァのいう世界文学空間において文学的自律を得る、すなわち脱政治的な読みを獲得するためのストラテジーでもあったということができるのではないかと考える。

この論文は、チェコの作家ボフミル・フラバル（1914-1997）の小説『あまりにも騒がしい孤独（*Příliš hlučná samota*）』（1976）（以下『孤独』）をポストモダン文学として読む試みである。その際、ポストモダンという概念、ポストモダンの特徴、『孤独』が三つの柱となっている。議論の大部分は、『孤独』のテキストにおけるポストモダンの特徴を確認することを通じてポストモダン作品としての『孤独』を浮かび上がらせる作業である。それを踏まえ、ポストモダンという概念は本質的に何を孕んでいるのかを明らかにし、再定義するとともに、チェコあるいは中東欧におけるポストモダンの役割（あるいはその逆）、を探った。ひどく乱暴に言ってしまうと、先に挙げた三角関係において「『孤独』→ポストモダンの特徴→ポストモダンという概念」というベクトルで分析を進め、最終的な結論部分では「ポストモダンという概念→『孤独』（すなわち中東欧の一つの文学作品）」というつなげ方をすることで円環を締めくくる。

数あるポストモダンの特徴として今回採用したのは、ポストモダンのシュルレアリスム的な側面、作品中でアイロニーを活用する側面、作品中で固有名詞をおびたしく借用する側面の三つである。『孤独』においては、これらのポストモダンの特徴が特に顕著に観察できると思われるからである。

実際のところ、中東欧におけるポストモダン文学は1980年代以降に本格的に興ったものとされ、『孤独』の執筆された1970年代は普通あまり顧みられない。しかし敢えてその黎明期の作品、つまりポストモダン文学として精錬される前の、チェコの文学性と確実に地続きの作品を取り上げることによって、チェコ（あるいは中東欧）の文学の性質がいかにしてポストモダンと切り結ぶことができたのかを考えることができる。『孤独』を敢えて選んだのは（もちろんそこにポストモダンの特徴が見られるという期待のためもあるが）そのためでもある。

以上の手法により、二元性を越えて、しかし相剋ではなく同居という形で、さらなる第三の表現様式を生み出すのが、ポストモダンの本質であるという一つの収穫を得た。さらにもう一つの収穫は、ポストモダン文学の系譜、とりわけ中東欧ポストモダン文学の系譜に『孤独』を置くことができたということである。チェコの、ボフミル・フラバルという作家（もちろんこの二つの属性にはかさなりあう部分もある）がポストモダン文学の先駆的作品を生み出す土壌をふんだんに備えていたことを示せたということだ。フラバルがシュルレアリスムの流れを汲んでいる影響もその一つであるが、他の二つ、アイロニーと歴史表象であっても、そこにはチェコ言語文化の特徴が表れているのである。

世界的文脈におけるレオニード・ヤコプソンの舞踊作品

梶彩子（東外大博士課程）

ソ連時代の振付家レオニード・ヤコプソン（1904－1975）は、主にレニングラードを拠点として活躍し、キーロフ劇場では5つの幕物作品（『シュラレー』、『スパルタクス』、『12』、『南京虫』、『奇跡の国』）や、「ミニアチュール」と名付けた小品を上演した。晩年は1969年設立の自身のカンパニーに活動の場を移し、生涯を通じて幅広いジャンル、様式、テーマの舞踊作品を手がけ、意欲的な創作活動を行った。ヤコプソンは、政治的な制約の多いソヴィエト・バレエ界で、常に個々の作品に適した舞踊言語を追求する姿勢を貫き、彼が果たした役割は大きい。その功績に対し今日まで十分な評価がされてきたとはいえない。ヤコプソンは、同い年の振付家で、アメリカに亡命し活躍したバランシンと比較されながら、国外に出なかったために十分な活躍ができなかった不運の天才であると評されてきた。しかし、実際は、国外の振付家との交流関係が確認され、相互に影響を及ぼしあっていたと考えられる。1960年に撮影されたバレエ映画『舞踊ミニアチュール』は、ヤコプソンが得意とした小品（ミニアチュール）を集めたもので、翌1961年、ヨーロッパで行われた2つの国際テレビフェスティバルで賞を受賞している。ハンガリーの振付家イムレ・エックは、バレエ映画を通してヤコプソン作品を知ったと手紙に綴っており、ヨーロッパの舞踊関係者がヤコプソン作品を見知る機会があったと言える。

バイオグラフィーで重要なのは、ヤコプソンが子供時代に世界一周を経験していることである。1918年夏、ヤコプソンを含むおよそ800人の子供たちがペトログラードから集団疎開でウラル地方に送られ、革命後の内戦により帰路を断たれ孤立状態に陥った。子供たちは窮地をアメリカ赤十字社のシベリア救護隊に助けられ、しばらく保護を受けたのち、日本の船舶会社の協力の元、海路で各国都市に寄港しながらペトログラードに戻った。バレエを始める前の少年期に経験した世界一周がヤコプソンの世界観に与えた影響は極めて大きかったと言える。しかし、この事実をまとめた本（Литовецкий В. Л. Ковчег детей, или Невероятная одиссея. СПб.: Азбука-классика, 2005.）が2005年に出版されるまでペトログラードの子供たちの世界一周は公に知られることはなく、ヤコプソン研究でも、ロシア語でこれまで出ているモノグラフィーでは一切言及されてこなかった。また、この世界一周で最初の寄港地が日本の室蘭であったことは、ヤコプソンが後年バレエ『ヒロシマ』を創作したと無関係ではなかったと考えられる。

本研究は、世界一周を始め、ソ連時代知りえなかった事実が入手できるようになった現在だからこそ可能である、ソヴィエト・バレエ史の枠組みを超えたより広義の世界的文脈におけるヤコプソン再考の試みである。

本発表では、ヤコプソンのバイオグラフィー及び主要作品の変遷をたどりながら国外の振付家との相互関係を取り上げる。

サンボとはソ連において 1938 年 11 月 16 日に公式に認可され成立した、2 人が組みうちにより競技する格闘技である。サンボ（САМБО）という言葉は「武器なしの自己防衛（САМозащита Без Оружия）」というロシア語の頭文字をとって作られたものである。同競技は、様々な民族格闘技の要素を取り入れて作り出されたとされており、その多くは旧ソ連諸国の民族格闘技であるが、アマチュアレスリングや柔道・柔術など諸外国のものも含まれている。

サンボの歴史に関する研究は日本では非常に限定的であり、サンボ成立の過程において柔道を通じた日本との関わりがあったことは明らかにされているが、その歴史については諸説存在しており複雑化している。また、日本への伝播と受容に関しては、これまでの研究で明らかにされていない。

本研究では、史料調査によるサンボの創設に関する歴史の整理及びその日本への伝播と受容についての解明を目的として、歴史学的手法を用いた史料の分析を行った。

調査の結果、サンボの起源に関しては、当時の政治・スポーツ情勢の影響によって歴史が複雑化したことがわかった。この結果、3 人の創設者と 2 種類のサンボが存在することになったといえる。日本へのサンボの伝播と受容に関して、サンボに関心を寄せたのは、全日本アマチュアレスリング協会と全日本柔道連盟の 2 団体であったが、日本への導入活動及び研究活動、日本サンボ協会の組織化を担ったのは日本アマチュアレスリング協会であったことが明らかになった。

スラヴ諸語における音交替

渡部直也（東大博士課程修了、東大）

本論文は、主としてロシア語、ポーランド語、チェコ語、セルビア・クロアチア語、及びブルガリア語に焦点を当て、スラヴ諸語における形態素の音交替について、形式言語学的観点から記述及び分析を行うものである。

主に扱う現象は、子音の硬口蓋化、母音の「弱化」、母音の交替、出沒母音である。まず弁別素性によって言語音を表示し、各現象を記述した上で、最適性理論の枠組みで現象の背後にある音韻文法を定式化した。一例として、子音の硬口蓋化は、子音・母音間での素性の一致を求める制約が、子音の変化を禁止する制約よりも優先されると一般化できる。

スラヴ諸語間において類似した音韻現象が見られる一方で、その起こり方には相違点も観察される。上述の硬口蓋化の場合、ロシア語では前舌母音 /i, e/ の直前で硬口蓋化子音（*палатализованные согласные*）が生じる。これに対しポーランド語では、/e/ の直前では硬口蓋化が生じない場合があるほか、歯茎音は硬口蓋子音（*палатальные согласные*）に交替する。さらにブルガリア語では、硬口蓋化を受けるのは軟口蓋子音に限定される。他の現象についても、例えば出沒母音となりうる母音は言語によって異なり、ロシア語では /o, e/、ポーランド語やチェコ語では /e/、セルビア・クロアチア語では /a/、ブルガリア語では /e, ə/ である。こうした言語間の差異について、上述のような制約を各音韻的環境に限って作用するものとして仮定し、それぞれの優先度の違いとして定式化した。

言語間の差異に加え、交替現象によっては言語内でのゆれ、すなわち、ある交替が一定の音韻条件下で生じるかどうか定まらない場合も指摘されてきた。ここで重要なのは、音韻的なゆれが一律なものではないという点である。筆者による数量的調査の結果、当該言語において交替パタンの適用範囲が拡張すると考えられるものと、いくつかの形態素においてのみ観察され語彙的に限定されているものとに大別できることがわかった。例えば、ポーランド語における母音の高段化（/o/ → [u]）や多くの言語における出沒母音の交替は、外来語をはじめ拡張が見られ、音韻的な「生産性」があると言える。一方で、軟口蓋子音の舌頂音化（いわゆる「第一口蓋化」・「第二口蓋化」）や、ポーランド語やブルガリア語における母音の前後交替、チェコ語における母音の長短交替は、特定の形態素に制限されている。本論文では、「生産的な」現象は異なる音韻現象が生じる複数の語彙層を仮定することによって分析した。一方で、限定的な現象は形態素特有の基底表示や制約を用いて分析した。

結論として、スラヴ諸語における代表的な音交替現象について、関連する音韻的メカニズムが明らかになった。一方で音韻的例外性については、適用語彙の拡張可能性から音韻的「生産性」の有無を見出し、それぞれに対して異なる種類の語彙的要因が作用していることが主張された。以上の分析結果は、音韻理論に対する新たな知見を提供するものである。